

第30回記念誌

関東地区  
生態学関係 修士論文発表会  
報告書



- 日本生態学会関東地区会
- 首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻

## はじめに

関東地区生態学関係修士論文発表会は、生態学関連の研究を行ってきた修士課程を修了する学生が成果発表をする場であり、運営は前年度にこの会で発表を行った博士課程の学生らによって行われています。また、この発表会は幅広い生態学研究の交流の場、学生同士の意見交流の場として、博士課程進学を控えた学生同士のネットワーク作りの場として役立っています。今年(2010年)で30回を迎えることを機に、今年の発表会報告を含め、この発表会がどのような趣旨で行われてきたか、また、その歴史について紹介するため、この報告書作成に至りました。これを読むことで、今後この会で発表する学生のみならずには、どのような会であるか知ってもらい、過去に発表者・運営者としてこの会に関わった方々には、この修士論文発表会が現在もお継続して歴史を刻んでいることを知って頂けたらと思います。更には、生態学会関東地区会内外、生態学分野内外の、若手研究者の研究活動の動機づけになれば幸いです。

## 30周年記念コメント

第30回に至るまでに、発表者・運営者・聴衆として、たくさんの方々がこの会に携わってきました。その中で、現在も生態学の研究分野でご活躍されている先輩の方々から、記念コメントをいただきました。



中嶋美冬  
Nakajima Mifuyu

### 生態学関係修士論文発表会 30周年に寄せて

生態修論発表会 30周年、おめでとうございます。私が発表したのは第23回だったのですが、発表時には23年もの歴史があることに気づきませんでした。今になって、運営してくださった先輩方、それを引き継ぐ若手の皆さんのおかげだったと、ようやく気づいた次第です。

私が修論発表会で得た最大のものは、所属を超えた研究者仲間でした。特に刺激的だったのは、実は発表会そのものよりもその後の懇親会かもしれません。運営担当の先輩が選りすぐった焼酎にすっかりはまったこともあります。初めて会う先輩方や同期とじっくり生態学について意見を交わしたことが大きな理由です。特にそのときに知り合った同期とはその後生態学会などでたびたび顔を合わせ、皆ポストクとなってから、ほぼ月1回の勉強会を開くようになりました。生態学について意見をぶつけ合うだけでなく、同期だけにキャリアについての不安や悩みを話す

場でした。そこにだんだんと知り合いが集まるようになり、私を始め創設メンバーが遠方へ散ってから、残る創設メンバーと共に後輩達が勉強会を続けてくれていますし、海外在住メンバーも帰国の際には勉強会に顔を出し、交流を続けています。

これから修論発表会に参加する方々には、研究発表するだけでなくぜひそこで人脈を広げていただきたいと思います。また運営と後援の皆様には、それを積極的に支援して下さるようお願いいたします。他人任せで恐縮ですが、私にとって切磋琢磨する仲間と出会ったこの会が今後も長く続くよう、願っております。

(執筆者自己紹介)

東大海洋研修士・博士課程修了、現在スタンフォード大学生物学部所属。専門は数理生態学、個体群生態学。



角谷拓  
Kadoya Taku

### 生態学関係修士論文発表会 30周年に寄せて

出会いが人を成長させるとはよく言われますが、研究も人との巡り合いによって発展する面を多分に持っていると思います。特に、上の世代の偉大な研究者の方々の成果や助言よりも、同世代の院生・研究者が良い研究をしていたり、自分には思いもつかないようなアイデアを持っていたりすることを目の当たりにするほうが、はるかに刺激を受ける(時には打ちのめされる)ことがあるというのは誰もが経験のあることかもしれません。私もそうであったように、修士論文をまとめ終えた時期は、その成果を持って刺激的な出会いを求めて外に出かけていく最初の良いタイミングであると思います。私が関東地区の修士論文発表会に参加したのもそのようなモチベーションによるものだったと記憶しています。

今年度から研究の場を東京からつくばに移しました。幸い異動先でも、多くの研究機関が集まる地の利もあって刺激的な出会いに恵まれています。私は生物多様性の保全という社会ニーズに応えうる学問領域の発展に貢献したいという思いをもっていますが、近頃では同じような興味と意欲を持った同世代の「同志」たちと集まって議論をする機会も増えてきました。議論の中から新しい共同研究やプロジェクトにつながるようなアイデアが生みだされる瞬間は何と云っても楽しいものです。議論に参加するメンバーは、将来的には発展をつづける保全生態学の一分野を担えるような研究グループを形成できればという野望(?)を持っていたりもします。

これからの長い研究人生でおそらくずっと続くであろう、出会いを通じて研究を発展させるこのような楽しい研究プロセスのスタート地点として、今後も関東地区の修士論文発表会が発展することを願っています。

(執筆者自己紹介)

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。その後、同大学院農学生命科学研究科特任研究員、同地球観測データ統合連携研究機構特任助教を経て2009年より国立環境研究所研究員として勤務。専門は空間生態学・保全生態学。現在は主に生物の空間情報を解析することで生物多様性の現状評価や将来予測を行うための研究を行っている。



福井学  
Fukui Manabu

## 前向きな科学としての生態学 ～異なる分野を積極的に取り込もう～

研究室の窓の外から、しんと降り積む雪を見ながら四半世紀前を振り返る。当時、日本の生態学にも、いわゆる「黒船」が来航し、社会生物学や進化生態学が脚光を浴び、若き生態学徒を魅了していた。それまで20年ほど続いていた物質生産や物質循環を軸とした研究は、なんとなく「流行遅れの分野」として捉えられていたように思う。

さて、1986年3月のこと。当時都立大の修士2年だった私は、関東支部修士論文発表会で発表。その様子や発表者としての感想を、支部会報に寄稿している。植物、動物、微生物など多岐にわたり、若さ溢れる発表があり、とても刺激的であった。その後博士課程に進学し、翌年度の修士論文発表会の幹事を務めることになった。東大小石川植物園の酒井聡樹さん（現在東北大）と都立大植物生態学研究室の西谷智美さんと3人で企画運営にあたり、小石川植物園と都立大（当時の深沢校舎）で会合を重ね、本番を迎える。当日の懇親会、そして、支部会報の記事作成も行き、次の幹事に引き継いだ。こうした一連の企画運営のノウハウは、その後も長く引き継がれていたに違いない。会運営を通じて多くの友人を得たことは、その後の研究者人生を歩む上で良かった。

当時の「リアル修論発表会」を振り返るために、関東地区会報35号を紐解いてみることにした。酒井氏がこんなことを記している。「1. こんなためになる会はめったにないので、今年度修論をまとめられる方はこぞって参加しましょう。多少分野がずれていてもかまわないと思います。専門外を異とする人に議論してもらうのは重要なことです。2. 今年の会は懇親会が充実していました。与えられた質疑応答の時間だけではかたじけなりの議論しかできません。腹をわたった議論ができるのは懇親会です。」若き日の酒井氏の文から、その後の『これから論文を書く若者のために』（共立出版）への展開・発展が垣間見ることができる。その後、彼は生態学の王道(?)を歩み続けている。

一方、私は博士學位取得後、工学系の国立研究所で排水処理研究、汚染原油の微生物分解等の応用研究に転じる。しばらく生態学からは遠ざかっていたが、大学に職を得てからは、生態学において新領域を開拓したいと強い意欲を抱いている。これまで、多少分野が異なる研究を重ねたからこそ、それは実現可能かもしれない。

「流行」は、いずれ「流行遅れ」になってしまう。どのような研究を展開するかは研究者次第であろう。次世代を担う生態学徒には、「こうでなければならない」と決めてかからずに、多少分野の異なる研究に曝露されながら、生態学の新たな一里塚を築いて欲しい。そう言う意味で、「修士論文発表会」をこれからも育てていってほしい。

(執筆者自己紹介)

1960年生まれ。1983年新潟大学教育学部小学校教員養成課程卒業、1989年東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了後、通産省工業技術院公害資源研究所入所。1998年東京都立大学助教授、2004年北海道大学低温科学研究所教授。専門分野は、微生物生態学。最近、南極などの極域や寒冷圏の物質循環にかかわる微生物の生理生態学研究を中心に行っている。研究室の人々とのあれこれをブログで発信している (<http://desulfonema.blog.ocn.ne.jp/lowtemp/>)。



可知直毅  
Kachi Naoki

## 関東地区修論発表会ことはじめ

関東地区の修士論文発表会は、29年前の1981年3月19日に、生態学会関東地区会の地区大会の一部のプログラムとして茨城大学で開催されたのが始まりです。当時、関東地区会は3月に1日の会期の地区大会を開催していましたが、開催地が茨城大学で都心から離れていたため、はじめて1泊2日で実施されました。会期に余裕ができたため、大会準備委員会の発案で修士論文という括りのシンポジウムを開催したところ、これがたいへん刺激的で好評でした。一般講演の発表は15分でしたが、修論発表は25分とり、質疑もたいへん活発でした。

当時、学会発表の座長は、シニアの先生方がやるものでしたが、修論発表会の座長は博士課程の院生などの若手が担当しました。他の人の発表についての議論をリードするという役は、当時の若手にとって新鮮であり、また自身の研究を客観的に考える機会にもなりました。私もそう

いう思いで第一回の発表会の座長をつとめた一人でした。

1981年以後地区大会の会期は1日にもどったため、こんなに面白い修論発表会を別に開催できないかということになり、前年の発表者の中から博士課程に進学した有志が次の年の発表会を企画・運営するという方式で、その後途絶えることなく続いてきました。現在は、関東地区会の主催で実施されていますが、地区会とは独立に自主開催されていた時期もあります。

第1回の発表件数は10件でしたが、次第に増え過去10年間は30前後で推移しています。植物6割、動物3割、微生物その他が1割という割合は、あまり変化していません。また、全国大会では近年保全関係の発表件数が増えています。修論発表会ではあまり大きな変化はなく、基礎的なテーマが9割を占めています。遺伝マーカーの利用など研究手法は大きく変わってきましたが、生態学の芽が着実に育っていることがうかがえます。

この修論発表会は、たまたま同じ年に修論を書いた他大学の同世代と知り合える貴重な機会です。人により修士修了後の進路はさまざまと思いますが、発表会での出会いが皆さんのキャリア形成にプラスになることがきっとあるはず。皆さんの今後の活躍を期待しています。

(執筆者自己紹介)

1953年生まれ。1978年、東京大学理学系研究科修士課程修了後、国立公害研究所（現国立環境研究所）入所。1995年、都立大学助教授を経て現在首都大学東京教授。専門分野は、植物の生理生態学・個体群生態学。最近、世界自然遺産候補地の小笠原の保全事業にもかかわっている。趣味は山歩き。アンパンマンのマーチの歌詞が気に入っている。

# 第30回発表会 報告

2010年2月27日、首都大学東京 南大沢キャンパス 国際交流会館にて、第30回 関東地区 生態学関係 修士論文発表会が開催され、79名が参加しました。発表後の懇親会には31名が参加しました。



発表会場：国際交流会館前



懇親会参加者

## ◆発表者およびタイトル一覧(氏名五十音順)

13大学、29人の修士課程を修了する学生が口頭発表を行いました。哺乳類・節足動物・植物・微生物を対象にした、多岐にわたる生態学研究が発表されました。

氏名	所属大学	発表タイトル
石川昌和	東京農工大学	細菌 DP-4 株の生残性に及ぼす、可視光および細菌 LM-1 株・緑藻 <i>Chlorella ellipsoidea</i> の複合影響
稲永路子	宇都宮大学	栃木県太平洋側低地ブナ集団におけるユビキタスジェノタイピングの試みと保全生物学的意義
遠藤幸子	東邦大学	モズ <i>Lanius bucephalus</i> の営巣場所の特徴と巣における捕食との関係
奥田圭	宇都宮大学	ニホンジカ ( <i>Cervus nippon</i> ) の高密度化に伴う植生の変化が鳥類群集に与える影響
柏田百代	早稲田大学	ハマダラカの生活史に基づく地理的分布の評価
小池良輔	宇都宮大学	栃木県茂木町における農用林施業がオサムシ科甲虫相に与える影響
小林弘幸	横浜国立大学	外来蝶アカボシゴマダラの分布拡大予測
小松大祐	東京農工大学	繊毛虫 <i>Tetrahymena thermophila</i> の分泌物が、細菌の基質消費および増殖に及ぼす促進効果
小宮英之	東邦大学	環孔材樹種ミズナラと散孔材樹種ブナの水分利用特性の比較
佐々木雄治	東京農工大学	木崎湖深層の低酸素環境下における微生物による N <sub>2</sub> O 生成・消費機構の解析～安定同位体比を用いた解析～
須貝杏子	首都大学東京	小笠原諸島父島の植栽されたセンダンによる攪乱の検討
杉本康則	東京大学	浮遊性被囊動物 <i>Salpa fusiformis</i> 遺骸の微生物分解過程に関する研究
滝島啓介	首都大学東京	富士山北西斜面雪崩跡地周縁部におけるミネヤナギの定着様式と樹木限界の動態
千布拓生	鳥取大学	大山隠岐国立公園奥大山地区を事例とした自然公園の植生計画の策定手法の検討
長尾圭祐	明治大学	多摩丘陵の里山林における管理と微地形が林床植生に及ぼす影響
中川さやか	東京大学	無融合生殖種ニガナの遺伝的多様性の解析
中島迪子	東京大学	富士山火山荒原の先駆植物に対するアーバスキュラー菌根菌の共生効果
永塚翔佳	東京海洋大学	北西太平洋産ミンクジラ外部形態の海域間変異
中西亜耶	東邦大学	キシノウエトタテグモの個体群存続可能性分析
中村満理恵	宇都宮大学	温帯性木本ツルの宿主植生構造に対する可塑的反応
野元加奈	宇都宮大学	栃木県茂木町におけるイノシシ被害地点の周辺環境特性
張替鷹介	首都大学東京	クローナル植物 <i>Glechoma hederacea</i> の成長に水、栄養塩および光の空間分布が及ぼす影響の実験生態学的解析
松浦優	筑波大学	カイガラムシ類における共生細菌および共生器官の進化についての研究
松嶋麻由子	首都大学東京	栄養塩の空間分布様式がクローナル植物カキドオシの個体間相互作用に与える影響
水谷紘菜	首都大学東京	植物の近隣個体間でみられる自己・非自己認識の仕組みと影響の実験生態学的検討
森田淳一	立正大学	栃木県日光の森林内においてハタネズミの生息密度におよぼす環境要因
山本薫	首都大学東京	ベニシダ類の無配生型と有性生型との混生集団における細胞学的・遺伝学的解析
山本浩平	首都大学東京	日本の野生マメ科植物ヤハズソウ根粒から分離された細菌の系統解析
吉田真弥	専修大学	中部ルソン島、パイタン湖南岸の湖底堆積物に記録された過去およそ 2,460 年間の植物珪酸体群の変遷

## ◆発表会・懇親会の様子

2会場に分かれて発表が行われ、学生同士の熱いディスカッションが繰り広げられました。懇親会でもお互いの研究について話し合う場面や、それぞれの進路について話し合う場面が見られました。



発表の様子



懇親会の様子

## ◆30周年記念企画

### フォトコンテスト『私の選ぶ“研究のひとコマ”』

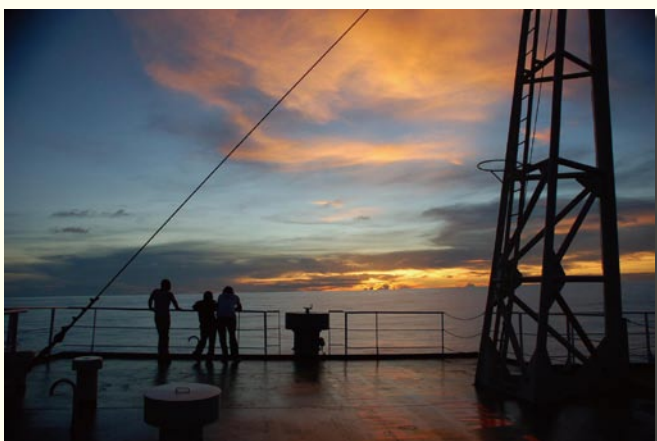
第30回発表会と同じく、2010年2月27日、首都大学東京 南大沢キャンパス 国際交流会館にて、フォトコンテストを開催しました。本企画は、関東地区生態学会関係修士論文発表会が2010年で30周年を迎えることを記念して企画されました。生態学研究では、対象となる生物やフィールドは様々ですが、その特徴は成果発表だけでは紹介できません。そこで、本企画では、調査中に各々が発見した“はっ”としたワンシーンや、対象生物に対する愛着を写真によって紹介してもらいました。

応募された27作品の中から4作品を受賞作品として選出し、その中から2作品を紹介します。表彰式は発表会後の懇親会にて行いました。なお、このフォトコンテストは首都大学東京 生命科学コースの学部生らによって運営されました。



フォトコンテスト表彰式

## 金 賞



### 今日も無事に調査終了

永塚翔佳（東京海洋大学）

この度、金賞をいただきました東京海洋大学大学院の永塚翔佳です。写真は長期の船上調査中のある瞬間にシャッターを切ったものです。昼の調査では、揺れる甲板の上で怪我をしないよう常に気を抜くことができません。ですが、1日の作業終了後に洋上ならではの美しい風景を仲間の調査員と共に、ぼんやりと見ることができたのは最高の経験でした。

## 特別賞



### 調査って調キモチい〜

千布拓生（鳥取大学）

地元の自治体の方と登山道の荒廃状況を調べるときに撮られた写真です。烏ヶ山（標高1448m）は山頂が風衝地と崩壊地になっていて結構スリリングな山なのですが、普段目にすることができない環境に生育する希少種を目にして興奮気味だったんだと思います。URBIOのエクスカージョンが鳥取でも開催されますが、その際に烏ヶ山もごらんいただけるとと思いますのでぜひお越しください。

## ◆発表会参加者の感想

・今回の発表を通して、同学年の人たちが生態学というテーマの中でさまざまな研究を行っていることを知りました。周りの人たちの頑張りをみることができ、自分自身頑張らなくてはと叱咤激励された思いです。この思いは、社会人になっても忘れずにいたいです。

(専修大学大学院文学研究科地理学専攻 吉田真弥)

・普通の学会と違う修士論文発表会であるため、手法や結果について厳しい意見が出されることもありましたが、しかし、修士課程を同じように2年間がんばってきた研究成果を発表し合うことができ、とても刺激になりました。他大学とこのような交流が出来ることはとても素晴らしいことだと思います。

(首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理学教室 滝島啓介)

・学部生としての参加でしたが、自分の専門とは違う分野の研究成果を知る良い機会であると同時に、レベルの高い研究発表を聞くことができ、今後、自分自身が研究を進めるための大変良い刺激となりました。私も自身の研究をより良いものとし、ぜひこの発表会で研究成果を披露したいと思います。

(日本大学 佐藤剛)

・私は今回の発表会で運営スタッフとして関わりました。生態学への関わりは授業や実習のみでしたが、発表はとても興味深いものでした。他のスタッフと共に楽しく取り組むことができましたが、なぜ私が乾杯の音頭をとることになったのかは未だに謎です(笑)

(首都大学東京 江川 博)

## ◆第30回(2010年)発表会 運営後記

### ～運営者決めから発表会当日まで～

冒頭でも述べたが、関東地区 生態学関係 修士論文発表会は、前年の会で発表を行った博士課程の学生らによって運営されてきた。つまり、運営者は一年前の発表者の中から選出される。近年、単独大学による運営が続いてきたが、今年2010年は首都大・東大の合同運営という近年まれにみる試みだった。

さて、運営者の選出方法だが、最優先基準は博士課程に進学する学生であること。修士課程修了後に就職する学生が多い今日、この選出基準でおのずと候補者は絞られる。私たち2010年の運営委員を選出するための雑談は、懇親会中アルコール片手に行われた。2009年の運営者・芦澤さん(当時、明治大学・博士後期課程1年)から話を持ちかけられたのが始まりだった。候補は、首都大・東大・東邦の3つであったが、前年の2008年に東邦で発表会が行われたという背景があり、候補は首都大と東大の2つに絞られた。しかながら、どちらかが進みでるわけもなくしばらくお互いに譲り合った。結局、常木(当時、首都大・修士2年)が、『じゃ、一緒にやろう!』と言ったのが合同運営に至った経緯だ。

当初、合同運営は人が多いぶん仕事を分担できるため、大した仕事ではないだろうと楽観視していた。しかし、実際は逆だったかもしれない。なぜなら、同じ都内でも文京区に位置する東大と八王子市にある首都大との距離は約40km。この距離によって電子メール中心のやり取りをせざるを得なく、それがお互いの意思疎通を図ることを難しくしていたからだ。発表会までの約5ヶ月間、そんな環境下ながらもやり取りを重ねていく中で、首都大は会場として、東大は渉外担当という互いの役割を把握し合い、作業を進めていくことでなんとか発表会開催までこじつけることができた。

このような、学会さながらの成果発表の場を学生だけで運営できる機会はめったにない。特に、今年は30周年でということも手伝って、各方面からの援助が得られたため、発表会の他にフォトコンテスト、この30回記念誌作成という例年になく学生主体の企画を行うことができた。研究の合間を縫って発表会の準備を行い、運営員の仕事分担にも苦労したが、学ぶことが多くあった経験だった。このような機会を与えてくださった関係者のみなさまにこの場をかりて御礼申し上げます。

2010年発表会運営委員:

石塚航、中馬美咲(以上、東京大学)

大滝宏代、常木静河(以上、首都大学東京)



2010年運営委員とスタッフ

## 謝辞

第30回発表会を運営するにあたって、援助して下さった日本生態学会関東地区会をはじめ、発表者をして頂いた学生のみなさま、発表会ポスターをデザインして頂いた東大・海洋研究所の吉澤さま、会場運営およびフォトコンテスト運営に協力して頂いた生命科学の学部生・大学院生のみなさんに感謝いたします。また、この30回記念報告書を作成するにあたりまして、記念コメントを書いて下さった、北海道大学・低温研究所の福井先生、国立環境研究所の角谷さま、スタンフォード大学の中島さま、ご指導を頂いた首都大学生命科学専攻の可知先生・松浦先生に重ねて感謝申し上げます。

# 関東地区生態学関係修士論文発表会の歴史

過去の関東地区会会報や発表会ホームページを元に、発表会発足時から現在に至るまでの発表会会場の変遷をまとめました。

※1：第3回、第18～21回については、発表会に関する情報が得られませんでした。

※2：関東地区会とは独立した学生自主企画。

回数	開催年月日	会場大学	発表人数
第1回	1981年3月20-21日	茨城大学・理学部	10人
第2回	1982年3月13日	東京大学・理学部	11人
第3回 <sup>※1</sup>	1983年	(不明)	
第4回	1984年3月10日	東京大学・理学部	13人
第5回	1985年3月9日	東京大学・理学部	15人
第6回	1986年3月15日	早稲田大学・教育学部	10人
第7回	1987年3月7日	東京大学・理学部	13人
第8回	1988年3月5日	東京都立大学・理学部	22人
第9回	1989年2月25日	千葉大学・理学部	19人
第10回	1990年2月24日	東京大学・理学部	21人
第11回	1991年3月2日	東京農工大学・農学部	21人
第12回	1992年3月8日	早稲田大学・井深大記念ホール	22人
第13回	1993年3月6日	東京大学・教養学部	30人
第14回	1994年3月12日	東京都立大学・理学部	19人
第15回	1995年3月4日	東邦大学・理学部	16人
第16回	1996年3月3日	東京大学・農学部	37人
第17回	1997年3月2日	東京農工大学・農学部	32人
第18回 <sup>※1,2</sup>	1998年	(不明)	
第19回 <sup>※1,2</sup>	1999年	(不明)	
第20回 <sup>※1,2</sup>	2000年	(不明)	
第21回 <sup>※1,2</sup>	2001年	(不明)	
第22回	2002年3月2日	東京大学・教養学部	33人
第23回	2003年3月1日	東京農工大学・農学部	30人
第24回	2004年3月6日	筑波大学・環境科学	28人
第25回	2005年3月5日	横浜国立大学・教育人間科学部	32人
第26回	2006年3月4日	東京都立大学・理学部	32人
第27回	2007年3月3日	東京大学・農学部	27人
第28回	2008年3月1日	東邦大学・理学部	29人
第29回	2009年3月7日	明治大学・農学部	32人
第30回	2010年2月27日	首都大学東京・理学部	29人

2010年3月発行

●編集・発行・文章校閲

第30回記念誌 関東地区 生態学関係 修士論文発表会 制作委員会

大滝宏代（代表）、後藤陽（レイアウト）、常木静河、松田亮蔵（写真）

（以上、首都大学東京）

石塚航、中馬美咲

（以上、東京大学）

●写真提供（五十音順）

千布拓生（鳥取大学）、永塚翔住（東京海洋大学）

●印刷：株式会社 相模プリント

●問合せ先 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻 事務室気付

Tel：042-677-2558

●本報告書の製作は、首都大学東京理工学研究科生命科学専攻の「企画評価力を備えた創造的生命研究者の育成」事業（平成19-21年度、文部科学賞補助事業「組織的な大学院改革推進プログラム」）の一環として行いました。

●ここに掲載した写真うち個人が所有するものに関しては承諾を得たのち掲載しています。